

よろい
甲を着た古墳人だより



公益財団法人
群馬県埋蔵文化財調査事業団

「甲を着た古墳人」の胃の本来の姿!!

金井東裏遺跡では、「甲を着た古墳人」とともに「横矧板鉾留衝角付胃」が出土しています。この胃については、古墳人だより Vol. 7と Vol.17で出土状況や火山灰との関係に注目して、①胃が古墳人の顔の下から出土したこと、②古墳人の顔と胃が密着していたため両方を一緒に取り上げてから切り離したこと、③CTスキャンの画像をもとに胃の構造を観察してきたことなどを報告しました。

胃の詳細な検討の結果、鉢下縁部の外径 263 × 210 mm、高さ 153 mm、内周長 63cm の大きさで、伏板、地板 1 段、胴巻板、地板 2 段、腰巻板の 5 枚の鉄板から構成されており、鉢部は横方向に細い鉄板同士を鉾で留める仕様になっていることがわかりました。また、頂部には、鉢の内外に 5.5 mm ほど突出した鉄の管の存在が認められました。胃は残存状態がよかったことから、小さな鉄板の小札を重ね合わせた、頬当てや首の後を守る鍔の構造まで明らかにすることができました。



■ 出土した冑はいつごろのものか

衝角付冑は4世紀末頃に出現し、7世紀ごろまで使われました。金井東裏遺跡から出土した冑は、鉢の部分は5枚に裁断した帯状の鉄板を横方向に組み合わせて鋳留しています。頬当てや鍔は、鉄製の小札を重ねて作っていました。



冑の内面の様子

■ 頬当てや鍔の構造は

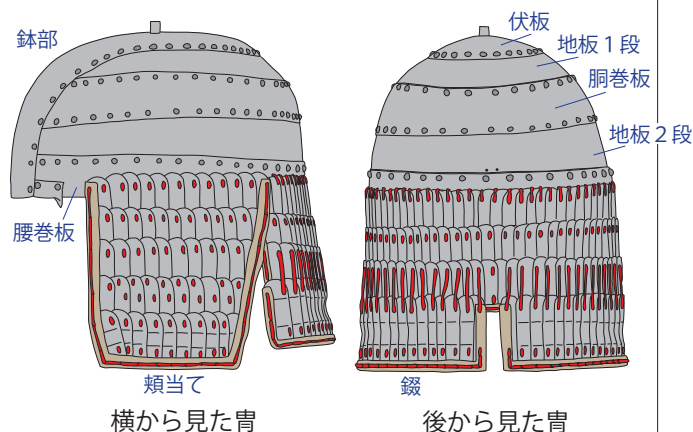
出土した冑の頬当ては5段、鍔は4段の小札列で構成されていました。小札1枚の長さは5cm、幅は2cmほどで、組紐によって綴じられていました。下端の縁辺には平絹ひらぎぬと革の装飾が施されていました。また、直接肌に触れる頬当ての内側には、平絹の痕跡があることから、内張がされていたようです。



頬当てに見られる平絹の痕跡

■ 冑を復元する

群馬県埋蔵文化財調査事業団では、出土した冑の観察や、CT スキャン画像や詳細な計測などを通して、冑を検討してきました。その結果をもとに右のような冑の復元図を作成しました。県立歴史博物館ではこの結果をもとに右下の写真のように冑を復元しています。



■ 冑のかぶり方は

冑はどのようにかぶっていたのでしょうか。そのままかぶると深すぎて目を覆ってしまいます。また、冑の頂部には鉄の管が突き出ているため、そのままでは頭を傷つけてしまいます。内張の跡も見られないことから、冑に頭を固定させるための緩衝材のようなものがあつたと思われます。



復元された甲を着た古墳人と冑